

〈註〉

- (1) Charles Morris の記号論をもとにしている。チャールズ・モリス著『記号と言語と行動』寮金吉訳 三省堂, 1976. p. 251. ただし pragmatics には語用論, syntactics には統語論の訳をあてている。
- (2) Tzvetan Todorov, *Grammaire du Décaméron*, (The Hague: Mouton, 1969), p. 18. ツヴェタン・トドロフ『幻想文学』三好郁朗訳 朝日出版社, 1974. p. 33. ツヴェタン・トドロフ「詩学」松崎芳隆訳 フランソワ・ヴァール他著『構造主義』佐々木明他訳 筑摩書房, 1978. 所収. p. 103.
- (3) アンジェロ・マルケーゼによる『構造主義の方法と試行』を参照している。アンジェロ・マルケーゼ『構造主義の方法と試行』谷口勇訳 創樹社, 1981. pp. 284-331.
- (4) ツヴェタン・トドロフ『幻想文学』三好郁朗訳 朝日出版社, 1974. p. 53.
- (5) 同上, p. 53.
- (6) Jonathan Culler, *Structuralist Poetics: Structuralism, Linguistics and the Study of Literature*, (London: Routledge and Kegan Paul, 1975), p. 136.
- (7) *ibid.*, p. 127.
- (8) Frank Kermode, *The Genesis of Secrecy on the Interpretation of Narrative*, (Cambridge: Harvard U. P., 1980), p. 41.

## 5 構造主義の興亡

進藤 鈴子

20世紀における一つの思想として、構造主義の果たした役割を過大評過しすぎるということはない。それは単に文学一般ではなく、あらゆる人間科学に深い影響を与えたからである。その起源となるのは、ソシュールの言語学であるが、そこには、言語に対する新たな覚醒というものがあつた。つまり、「言語機能と思考過程に対する新たな覚醒が、人間の普遍性という事実を発見させたのである。」<sup>(1)</sup> そこから、19世紀から20世紀にかけて蔓延していた学問の個別化という現象から、全体としての学問、相互関連する学問へと進展したのである。

構造主義は、第二次世界大戦後、フランス思想界に浸透していたサルトルの実存主義を中心とした現象学の人間中心主義に対して起こったものである。それは第一に、サピアやウォーフが主張したように、「自然言語は、それを使用する民族の世界観、意識を、無意識のうちに決定してしまっており、その意味では、『言語が世界を分割する。』」<sup>(2)</sup> という事実に関心が向けられたということ、第二に、1945年、レヴィ・ストロースが『言語学と人類学における構造分析』という論文において、姻戚関係の現象と、言語学の現象とは同じタイプに属することを宣言したことに由来する。文学においては、ロラン・バルトが1966年に『物語の構造分析序説』の中で、「物語の構造分析には、言語学そのものを基礎モデルとして与えるのが理にかなっている。」<sup>(3)</sup> といっている。

構造主義と呼ばれる個々の批評の実践は多岐に亘るが、それらの共通項は、ソシュールの言語学である。そして、その言語学の目標としたものは、「ラングの共時的分析」にほかならなかった。構造主義の特質、その存命と衰退は、この言語学の認識方法によって決定されるものである。それによれば、この時、デカルト以来の cogito の哲学に対して絶対的な不信が向けられ、主体の概念が追放されたのである。その代わりに、その主体が無意識のうちに組み込まれている体系そのものを記述することに関心が向けられたのである。もはや、主体は語ることをせず、「構造の中で記号に還元される」<sup>(4)</sup> のである。こうして、思考の基盤が、個から全体へと移行したのである。文学においては、個々の作品であるパロールに対するラングの普遍的法則——物語のモデル——を構築しようとし、「文学としての科学」をめざすことになる。

だが、構造主義そのものも、自らの壁を突き破らねばならなかった。それは、自らに向けられた批判を克服することに始まる。すでに1965年に、ピエール・マシュレー Pierre Macherey は、構造主義における「非歴史性」を攻撃しており、また、1966年に出版されたジャック＝ラカン Jacques Lacan の『エクリ』及び「テル・ケル派」の人々は、言述における「語る主体」<sup>(5)</sup> の重要性を主張し始めている。さらに、ジェフリー・ハートマン Geoffrey Hartman やポール・ド・マン Paul de Man は、構造主義を乗り越えようとする試みを提出している。これらは、まさに構造主義の二大特質である、共時性と体系とに向けら

れたものである。何故なら、体系そのものは閉じて完結したものであるから、その内部での個（記号＝主体）の変化（時間性）や、秩序に対して異質なものとかを、構造主義は無視せざるをえなかったからである。このように、構造主義と記号論は、互いに密接な関係をもって進展してきたのであるが、今や構造主義は記号論に包摂されつつあると言える。何故なら、構造主義の標榜した体系中の記号間の関係とその交換や対立の原理は、W・モリスが記号論を分類して、語用論、意味論、統辞論としたうちの、最後のものに属しているに過ぎないからである。前者の二つは、当然、語る主体と、体系外のものとの接点を要求しているのである。構造主義は今や拡大されつつある。

一方、フーコー、ラカン、デリダ（彼らこそ、構造主義を究極にまで押し進めた人物なのだが）は、構造主義が根幹とする言語の体系の文学への応用、及びその客観性そのものを疑問視しはじめている。<sup>(6)</sup> こうして、いわゆる「ポスト構造主義なるものは、固定的記号の穏やかな統一と、単一化した主体を破碎した」<sup>(7)</sup> のである。構造主義に、今や人間と歴史とが回復——もちろん構造主義以前と同じ形でではありえない——されつつあると言っても過言ではないであろう。

現代の批評は、自らの姿を見極めようともがいている状態にある。“deconstructionist” と呼ばれる批評家達にしても同じであろう。<sup>(8)</sup> かつてスコールズ Robert Scholes は、「人間にとって世の中の耐えられないものを、認めうるものにするのが神話である」としたレヴィ・ストロースの言葉を取り、もし、そうであれば、構造主義こそ現代の神話である。<sup>(9)</sup> と言ったものだが、今日、構造主義及びそれ以後の批評は、自らの中に常に耐ええないものを発見して、それ故に“autocritical” と言われるような批評体系を築いているのではないだろうか。そうとすれば、構造主義そのものも、神話になりそこねた神話なのではないだろうか。

〈註〉

- (1) Robert Scholes, *Structuralism in Literature* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1974), p. 190.

- (2) 磯谷孝, 「構造主義と文化記号論」『理想』1982年9月号所収, p. 84.
- (3) ロラン＝バルト, 「物語の構造分析序説」, 『物語の構造分析』花輪光訳。みすず書房。所収。p. 4.
- (4) 市倉宏祐, 「構造主義はいかにして哲学たりうるか」, 『理想』同掲書, 所収。p. 10.
- (5) 特に, ジュリア＝クリステバの「語る主体」概念は, 構造を自ら壊すものとして, 非常にダイナミックな要素を含んでいる。
- (6) cf. Robert Young, ed, *Untying the Text: A Post-Structuralist Reader* (Boston and London: Routledge and Kegan Paul, 1981), Preface, p. vii. ジャック＝デリダはまた, 『グラマトロジーについて』の中で, 言語学的思考方法に対して, 西洋の言語中心主義 logocentrism の長い歴史の一部にすぎぬという批難を向けている。
- (7) Ibid, p. 8. Josué Harari は, 構造主義とポスト構造主義の最も大きな違いについて次のように述べている。“The most fundamental difference between the structuralist and post-structuralist enterprises can be seen in the shift from the problematic of the subject to the deconstruction of the concept of representation.” (“Critical Factions/Critical Fictions,” in *Textual Strategies: Perspectives in Post-Structuralist Criticism* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1979), p. 29.)
- (8) この名称で呼ばれるようになった批評の火付役とも言えるデリダ自身は, “deconstruction” について次のように述べている。「この語は構造主義の時代にしかうけることができませんでした。私はそれに驚かされたものですが……。脱構築 [déconstruction] するとは, 同時に構造主義的でも反構造主義的でもあるような挙措なのです。」(「哲学の痕跡について——クリスチアン＝デカンとの対話——」, 高橋允昭訳。『現代思想』1982年9月号所収。p. 227.)
- (9) Scholes, p. 170.

\* \* \*

付記 本稿は昭和57年4月名大英文学会における「構造主義と記号学」と題したコロキウムを元にしたものである。